

**「カモメに飛ぶことを教えた猫」 ルイス・セプルベダ 著 河野 万里子 訳 白泉社
1998年6月発行**

最近、若い頃に読んで気に入っていた本が無性に懐かしくなり、手元に置いていつでも読み返したいと、少しずつ購入するのが楽しみになっています。それらの本は、時を経て読んでみても色褪せておらず、今の私の心にもすっと入ってきて、昔の友人に再会したような嬉しい気持ちになるのです。自分の感性と合って、心惹かれた本というのは、普段は特に思い出すことはなくても、ずっと変わらず自分の中に存在していて、自分の原点となっているのだと、しみじみ感じています。

この『カモメに飛ぶことを教えた猫』も、私にとってそういう1冊で、出来れば当時読んだ単行本が欲しかったのですが、現在書店にあったのは2005年発行の新書だったため、それをつい先日購入して、読み始めようとしていました。

そんな時、この原稿を書かせて頂くことになり、最近出版された本から選ぶべきか、過去に読んだ本から選ぶべきか迷いましたが、学生の皆さんにお薦めするなら、若い時の感性で選んだものの方が良いかと思い、旭川高専の図書館にも所蔵がある、この本をご紹介しますことにしました。

銀色の翼のカモメ・ケンガーは、6時間飛び続け、体力を回復しようと魚を食べていた海で、原油の黒い波に飲み込まれてしまいます。命からがら、どうにか原油の海を脱出し、力を振り絞って飛ぶケンガーでしたが、ハンブルクの教会が見えたところで力尽き、近くへ墜落。そこには太った真っ黒な猫・ゾルバがいました。酷く汚れ、消え入りそうな息のカモメを励ますゾルバ。何とか助けたいと、仲間に相談しに行こうとした時、カモメに弱々しく呼ばれ、3つの約束をすることになり…。

本来ならば、猫はカモメを食べてしまいそうなものなのに、瀕死のカモメに誓った約束を守り抜こうと、懸命なゾルバと仲間達。そして、原油に目も羽もやられてしまい、死の恐怖と戦いながらも、人間みんなが悪いわけではない、偏った考え方はだめだと己に言い聞かせて、最後の力を振り絞ったケンガー。彼らは物語をとおして、とても大切なことを教えてくれています。あとがきにも書かれていますが、著者のルイス・セプルベダ

(1949-2020)の人生経験を知ると、それをより一層感じ取ることが出来ると思います。

この作品は、ヨーロッパでベストセラーとなり、〈8歳から88歳までの若者のための小説〉と謳われたそうで、日本では中学生の一部の英語の教科書に、かなり短く要約されたものが掲載されたり、ファミリーミュージカルになったりしています。読みやすい作品ですので、ぜひ素敵な挿絵と共に、作品の世界観を味わってみてください。